

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第142号

これからの博物館の在り方 —博物館が地域を作る「核」となる—

板倉敏郎 (元柿生中学校校長 元柿生郷土史料館相談役)

博物館の在り方が変わりつつあります。昨年4月に文化財保護法の一部が改正されました。それに前後して、国や文化庁が進めようとしている事業として「地域の美術館・博物館クラスター（文化集積地）形成支援事業」が始まりました。地域の文化施設が互いに連携しながら、地域文化資源活用の一体的整備に関する事業です。例えば、麻生区で考えるならば柿生郷土史料館と地域の美術館施設、音楽関係施設、図書館、大学、麻生区諸施設等が連携しながら、より効果的な文化活動を推進しようということです。そして同時に地域の個性を明確にしながらかそれを生かす産業の推進も大切なこととなってきます。

例えば昨年、地元で収穫した禅寺丸柿を使用した「禅寺丸柿スパークリングワイン」が完成し販売されると聞いています。ビンラベルのデザインは地元、岡上の和光大学学生の作品とも聞いています。地元産業と大学のコラボレーションです。

また、最近の情報では、川崎市が岡上地区と連携して、収穫した葡萄をもとに「かわさきそだちワイン特区」の申請を国に対して行なったそうです。本格的な地元の葡萄酒（ワイン）の醸造が開始されるようです。

先日、NHKの番組「クローズアップ現代」で紹介されたことですが、最近のアメリカやヨーロッパで行なわれ始めたある動きがあります。それは、日本酒が日本ではなく、現地で栽培された米をもとに、地元の水で、地元のワイン酵母を使用し、地元の風土を生かした清酒の製造を始めたそうです。これは地元の人々にも大変喜ばれ、地元の料理にも大変よく合い、大変な人気だそうです。この発想は、実に理に適っているのではないのでしょうか。「地元の料理には、地元の酒」ですね。近い将来、日本でも、欧米諸国に負けない、日本人の口に合った美味しい川崎産のワインが出来上がるのが楽しみです。

奈良県にこんな事例もあります。昭和24年、創業以来約260年間続いてきた老舗の醤油醸造元が地域の方々に惜しまれながら廃業してしまいました。70年後、当時当主の孫が、蔵から発見された古文書を解読し、さらに放置されていた蔵の天井や梁に生き残っていた酵母菌を発見。最近この酵母菌を使った醤油の醸造を再開し始めたそうです。この醸造所で造られた醤油の味を覚えていた地域の人々からは、懐かしさだけでなく260年間の郷土の歴史と、その重みを感じたとの感想が寄せられたそうです。

柿生にも昔は、各村々に造り酒屋があったそうです。今でも「さかや」という屋号が残っているお宅もあります。麻生区内でも、江戸時代から続くいくつかの造り酒屋があったと思われます。江戸時代に祖先が味わった郷土の味に触れる事も夢ではありません。これも地域の連携で可能となるのでしょうか。

昨年5月、東京で「観光考古学学会」というものが立ち上げられました。遺跡を観光資源として捉え活用の方策について考古学を軸に関連分野とともに多種の観光産業との連携で総合的に考えていくことを目的にしています。海外では、すでに一般的に行なわれていますが、日本では新しい視点にもとづいた今後の文化財保護及び活用の重要な取り組みになってくると思います。川崎市にはたくさんの古代遺跡が眠っています。それぞれが持ち場持ち場で連携しながら取り組めたら素晴らしいものが出来上がるでしょう。

今、柿生や全国各地域、各団体で始まった、新しい取り組みのいくつかの例をお示しました。地域の多くの団体や個人が手を組めば出来ることは沢山あり、もっと広がっていくと思います。博物館は本来、地球上のあらゆる分野に亘って知識を広め、過去・現在・未来を探求する場所でもあります。そういう意味からも、柿生郷土史料館等の博物館施設が地域の軸となり、あらゆる角度から地域の歴史・文化・個性を引き出し、これを地域の研究団体・諸機関・施設・産業や人材と連携して、未来の創造につなげていければ地域にとっても大きな活力になると考えております。

鶴見川流域の中世
その2

中世人の生活の舞台としての鶴見川 (2)

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

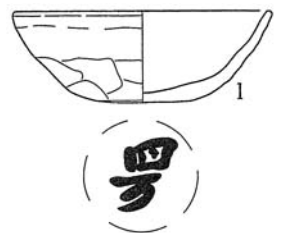
鶴見川流域の小支流(谷戸)における中世人の生活の跡をいくつか紹介する。

鶴見川最上部にある町田市下小山田町大泉寺には、小山田氏の伝承が伝わっている。小山田別当有重は平安時代末期から鎌倉時代初期に活躍した武蔵国有力武士団である秩父平氏の一族で、小山田荘(保)を名字の地とした武士であった。付近の多摩丘陵には館跡や多くの中世城郭跡が残る。この地域には武蔵府中に通じる鎌倉街道上道をはじめ古代から中世の道路跡が幾本も貫通していることから、小山田氏が交通・流通に関与していたと考えられる。

小山田荘(保)住民や小山田氏の配下の人々も、これらの生業に関わっていたことであろう。

小野路川の源流域には鎌倉街道沿いに小野路宿が営まれ、集落の南端の小高い所にある小野神社には応永10年(1403)銘の銅鐘が寄進されていた。「往来の人をして晩宿早発にその時を知らしむ」「道路の患難を免れしむ」(原文を読み下し文に直した)などの銘文から15世紀前半には小野路宿が存在したことがわかる。残念なことに、この鐘は小野神社から失われて逗子市の海宝院に現存している。文明年間両上杉の戦乱に際し、山内上杉方の兵に陣鐘として持ち去られたと伝えられている。

麻生川の源流域(地元では神川と呼称)にあたる稲城市平尾町杉山神社付近の発掘調査では、平安時代の建物跡から祭祀に使用されたと考えられる「四万」「酒?」と書かれた墨書土器が出土している。遺跡出土の墨書土器は、村落内の神仏に対する祭祀、儀礼行為などの際に、土器に一定の字形を記したものとされている。したがって、平尾出土の墨書土器は祭祀に関連するものとして大過ないであろう。鶴見川は生活用水や農業用水として恵みを与えてくれる存在であるとともに、洪水や干害などの自然災害をもたらす畏怖すべきものでもあった。



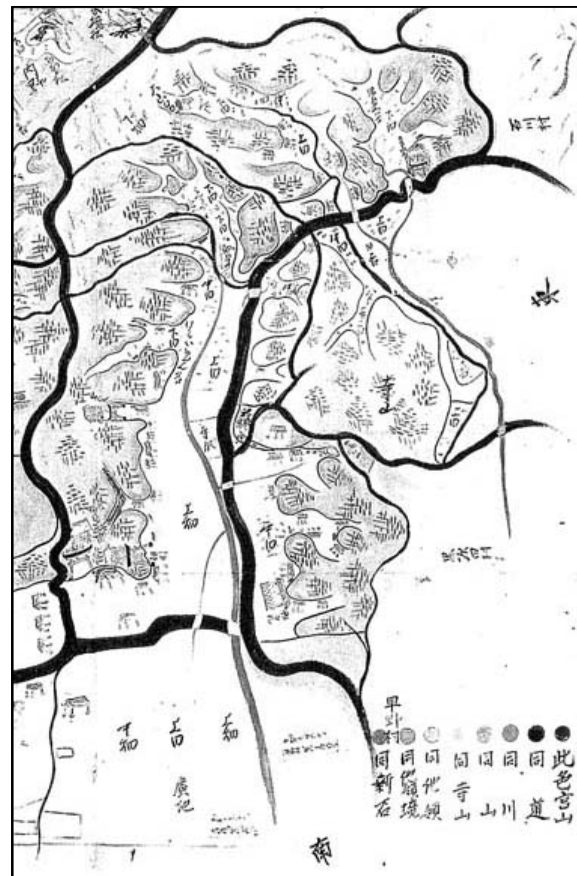
麻生川源流域から出土した墨書土器 土器の内側底部に「四万」と墨書

このため水源において「水」や「河川」の神を祀ったと考えられる。

有馬川の源流域にあたる川崎市宮前区有馬の堂尻谷戸からは、鎌倉時代末期の元亨3年(1323)銘板碑をはじめ多数の板碑片や常滑焼の蔵骨器などの中世墓が出土している。この墓地は14世紀前半から16世紀まで引き続き使用されている。そうしてみると、この付近に中世村落があり、墓地を営み板碑を造立して常滑の陶器を入手できるほどの財力を持った有力者の存在が浮かび上がってくる。有馬川流域はこのほかに正福寺所在建武4年(1337)銘板碑をはじめ多くの板碑が集中する地域である。川崎市中原区小杉御殿町にある西明寺は、鎌倉幕府を主導した最明寺入道北条時頼の伝承が伝わる古刹であるが、元は有馬川の左岸の西明寺跡にあったと言われている(『新編武蔵風土記稿』)。

王禅寺は黒須田川の源流部に所在する真言宗の古刹であり、等海や印融などの学問僧が止宿している。王禅寺山門脇の池は源流の一つであろう。宝暦12年(1762)「王禅寺村絵図」を見ると、王禅寺領の谷戸には地味が良く生産性の高い「上田」の表記が多くあることに気づく。谷戸田が王禅寺経済の基盤であることがわかる。

鶴見川流域のそれぞれに中世人の多様な営みがあったと考えられる。



宝暦12年の王禅寺村絵図

中央右に寺山と記した辺りが王禅寺領

以上は考古資料や金石文史料を通じて鶴見川を見てきたが、鶴見川流域に関係する中世の文献史料に少し触れたい。渋口(子母口)郷に関する至徳元年(1384)の「正本文書」は、南北朝期の村落景観を理解する上で貴重な史料である。建武元年(1333)「鶴見寺尾郷絵図」はこの地域の地形的な特徴である谷戸と丘陵を描いて示唆に富んでいる。「正本文書」・「鶴見寺尾郷絵図」のいずれも東国の村落を記した数少ない文書と絵図である。2点の史料がいずれも鶴見川に関係しているので、次号で取り上げてみたい。

シリーズ
教育の歩み 第2部

学級の誕生(12)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆続・私設学校◆

モニトリアルシステムやそれに続く組織化された学校は、システム教育を行っていました。そこでの教師の役割は、システムの代弁者であり、命令の執行者であることに留まっていた。これに対して私設学校での先生と生徒の関係は、下層社会に生きる人々の相互に助け合うことが当たり前の、濃密な近隣関係の中にありました。当然両者は大きく違っていたのです。

例えばこんな例があります。スラム街の住人は、夏の河原での身体拭きを除けば、まず風呂には入れませんし、衣服の洗濯も稀でした。当時ではなお高価であった石鹸を買うことも到底できません。私設学校の子どもたちは、ボサボサの虱まみれの髪に汚れた服という、大変不潔な身なりをしていたのです。他方で、規律の厳しいシステム化された学校は、衛生環境の保持に熱心でした。こちらの学校では、不潔な身なりやボサボサ頭は取り締まりの対象とされていました。不潔な身なりには罰を科し、強制的に清潔の習慣を身に付けさせようとしたのです。

底辺の労働者たちが、組織化された学校、何事も時間単位で進行させる学校を嫌った理由がもう一つあります。それはシステム化した学校が教える、知識や生活規範の問題でした。底辺の労働に従事するだろう子どもたちにとって、仕事や生きるために必要な読み書きや計算は、ごく限られたものでした。これに対しシステム化した学校が教える内容は、広く中産階級や熟練労働者の子どもたちが、将来就くかもしれない仕事を想定してのものでしたから、学習量も多かったのです。当然そのような知識は、底辺の労働者世帯の子どもたちが就くであろう仕事や現実の生活では、必要のないものでした。また中産階級向けの学校が教える倫理観や生活規範は、中産階級に支持された禁欲主義の倫理観を色濃く反映していました。当然のこととして、教育内容にも教師の話す言葉の節々にも、階級的性格が反映されていたのです。こうした勤勉や正直さを強調する教育内容は、食うや食わずのギリギリで不安定な生活を強いられている子どもたちや親たちには、受け入れ難いものでした。

例えば、現在ではごく当たり前になっている「カンニングはしてはならない」という決まりごとについて見ると、この規定は、競争的個人主義に基づく中産階級の倫理観には問題なく適合したのですが、「困った時には助け合うのが当たり前」だった貧しき人々の相互扶助の精神、倫理観からすると、「答えを教えあうことが、なぜいけないのか」となり、到底受け入れがたい規定ということになります。

スラム街を中心とする私設学校は、このような存在だったのです。それゆえ私設学校は、勤勉と正直を核とするブルジョワ的倫理観の徹底を目指すブルジョワ階級と政府にとって、無視しえない厄介な存在であると、認識されたのです。それは撲滅しなければならないものでした。労働の倫理を解体し、労働者階級のまとまりに鉄槌を打ち込むために、私設学校は放置しえない癌細胞のように見えたのです。ここに登場するのが、無償の義務教育という発想でした。

私設学校の存在を、ブルジョワ的社会秩序への脅威と受け止めた政府は、全力で私設学校潰しに乗り出しました。その最初の具体策が、1870年制定の初等教育法でした。ここに初めて国家が法律によって教育制度を定めたのです。ここで国家は、義務就学のための条例制定権を、各地の学務委員会に付与したのです。学務委員会が、地域の学校を精査して、各学校が公的補助に相応しいかどうか、判定することになったのです。私設学校も、当然のように調査の対象になりました。私設学校が、学校としての登録申請に応じるなら、学校として認知した上で、調査を実施する。調査で、学校としての体裁を十分整えていると判断できれば、大幅に増額された補助金が支給されるのです。

一方で、申告に応じない私設学校は、学校名簿に登載されず、申告に応じたけれども、査察の結果学校としての体裁を整えていないと判定された学校もまた、学校名簿から外されてしまうのです。スラム街の非衛生的環境の下で、子どもや親たちの要求に添った授業を行う私設学校が、学務委員会の調査に合格する可能性はまずありません。まさしくこの措置は、私設学校潰しの一環だったのです。(続く)



カンニングを取り上げた東京大学の壁新聞

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

3月 休館 **4月** 18・25日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (4月4・11日は休館です)

第84回
カルチャーセミナー

秩父流平氏 畠山重忠と稲毛重成 ～その鉄並びに杉山神社とのかかわりを追う～

東国の鍛冶棟梁と言われる秩父氏の嫡流 畠山重忠と彼の従兄弟 稲毛重成。この二人の鉄とのかかわりを確認し、さらに杉山神社との接点を探ります。

杉山神社の分布範囲は、秩父流平氏の勢力分布と驚くほど重なっており、杉山神社解明の新たな糸口からのアプローチです。

日時 : 4月25日(土) 13時30分～15時30分

講師 : 岡田誠治氏(麻生歴史の会副委員長)

会場 : 柿生郷土史料館特別展示室

日程変更

柿生郷土史料館友の会
第12回史跡見学バスの旅

横浜・横須賀めぐり ～三溪園と軍港巡りそして戦艦「三笠」～

日時 : 2020年4月14日(火)

主な見学先 : 三溪園 東京湾を望む横浜の東南部本牧に広がる広大な庭園

横須賀軍港巡り 約45分間のクルーズ

戦艦「三笠」 日露戦争の旗艦

(当日寄港している自衛艦があれば、その特別見学に切り替え)

募集人員 : 先着45名

集合 : 午前7時45分 新百合丘駅北口(21ビル前の赤道)

解散 : 午後6時頃 新百合丘駅北口→柿生駅付近

費用 : 8,500円(昼食付)

申し込み : 往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで

必要事項 : 参加者全員が郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先 : 215-002 川崎市麻生区上麻生6-40-1 柿生中学校内 柿生郷土史料館
(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切 : 3月15日(日)

問合せ先 : 小林基男 080-5513-5154 または 044-989-0622

またはメール zabi@za.wakwak.com

第18回 特別企画展

続 戦中・戦後の教科書展

柿生中学校の創立70周年記念事業に、協賛する形で開催した、戦中・戦後の教科書展は、幸い好評のうちに終了となりましたが、皆さまから、再度実施してほしいとの声もあり、2017年10月以降に、新たに見つかった戦前・戦中の教科書も相当数に上ることから、新発見の教科書も加えた形で、ここに改めて、「続 戦中・戦後の教科書展」として、再度教科書の特別展を開くこととしました。現在の教科書との違いを、しっかりご覧ください。

期間 4月18日(土) ～ 8月29日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室